

彙報

惹くところである。殊に承久後が莊園に及ぼした影響を論じ、承久後後の著しい現象として、身分的隸屬關係を明確に表示する寄人・神人の發達を指摘された點は、注目に價する論議かと思はれる。

後篇の家領の傳領は、政治の中樞部の動靜に對して深い理解を持つて居られる著名をまつて始てなし得るところであり、莊園の移動と政權の推移との微妙な關係に就いて、多くの暗示を得るところのものである。莊民の生活に關する叙述は、かゝる問題が殆ど顧みられなかつた時に、早くも問題の所在を示され、その後の研究に寄與されるところの多かつたものとして、劃期的なものであつた。

以上の如き内容を有する本書は、東大寺領の莊園の研究として基本的な勞作であるが、又それと同時に一般の莊園の研究にも、多くの示唆を與へるものである。併し乍ら、著者自身も云つて居られる様に、東大寺領の莊園のすべてが、本書に於て論究されたわけではない。更らに又、本書に於て論究された東大寺領の諸莊園に於ても、問題は多く殘されて居る。今後それ等を論究し、ひいて莊園を解明しやうとするに當り、著者の長年の努力の結果生れた本書が、多くの貢獻をなすであらうことを思ふのである。(菊版八〇九頁、星野書店發行、定價九圓) (田井啓著)

史學研究會

大會 十一月四日(土)、五日(日)の兩日に互つて、恒例の本會大會は舉行せられた。その大概を摘記すれば、

第一日は午後一時より樂友會館講堂に於いて公開講演會を催し、左の如き講演があつた。折からの秋雨にも拘らず會する者約百名。

一、高麗と明との場合

末松保和氏

一、興亞地政學大意

小牧實繁氏

一、南越建國の事情

和田清氏

右の中末松氏講演は本誌本號に掲載、和田・小牧兩氏の講演も追つて本誌に掲載の筈である。

第二日は見學日として午前十時醍醐三寶院に集合、參會者は京大俱樂部會員をも併せて約百五十名、先づ集會所の廣間に於いて本學助教中村直勝氏の「醍醐三寶院に就いて」の講話を聞いた後、本學文學部囑託赤松俊秀氏説明の下に國寶の殿舎に入り、玄關より葵の間、秋草の間、勅使間をはじめ宸殿、純淨觀、本堂、白書院、就涼亭等各部の建築と障屏畫を巡覽、史蹟名勝に指定された庭園を眺望した後、五重塔及金堂に到り、塔内の板繪や金堂の佛像を縱覽して正午集會所に還り一同晝食を俱にして散談した。

午後は靈寶館を訪れ、再び赤松氏に解説の勞を煩はして展觀された醍醐寺の什寶七十餘點を見學した。此の日特に醍醐寺に於いては本會の爲め別室にも席を設けて御歴代の宸翰を披展され、其中には大手鑑等平生拜觀の機を得難いものも難つて參會者に深い悦びを興ふるところがあつた。是に醍醐寺並三寶院に對し厚く感謝を表する次第である。左に同日の講話概要並びに出陳史料の目錄を掲げる。

醍醐三寶院に就いて

中村直勝氏

貞觀の末年頃、東大寺に於いて三論宗を研究した聖寶は、當時東大寺の支院の如き關係にあつた近江石山寺へ往復する途中、笠取の山中に靈泉あるを知り、そこに草庵を結んだのが本寺の草創である。その時の外護者は恐らく宇治郡大領宮道彌益かと思ふ。聖寶は修驗道の研究者でもあつたので、醍醐寺は今後長く修驗の本山として活躍する事になる。

醍醐天皇の皇太子保明親王が、はしなくも薨去されたのでその王子を再び立て、皇太子とされたが、これまた夭折されたから、天皇は皇男すの御降誕を本寺に祈られた。その時本寺の座主であつた觀賢僧正の法力にや皇后穩子は保明親王以來二十一年目にしめてたくも懐妊された。それが後の朱雀天皇であり、間もなく又後の村上天皇さへ御降誕まし／＼たので、本寺に對する皇室並に藤原氏の崇信は頗る大であつた。

その後、藤原氏の時代は寺運稍々傾たが、堀川天皇の頃に第十四代の座主勝覺僧正が定賢・遍智院義範・鳥羽院俊の三法を合せ

傳へたので、その建てた灌頂院を三法院と名付け、後にこれを三寶院と改めた。それ以來、三寶院はその他の塔頭寺院を賤し、醍醐寺を統べる勢力を有したが後に吉野朝時代に、日野賢俊が三寶院門跡となつて足利氏と深き關係を結ぶに至り、斷然醍醐寺の代表寺院となつた。その同じ頃に報恩院には文觀があつて眞言宗を代表して天台宗の法勝寺圓觀と共に、後醍醐天皇に最企を盡した事は有名である。

これより先、三寶院の驕覺は東大寺の別當を兼ねたが、東大寺が平重衡によつて焼かれるやその再建に俊乘坊重源異常の努力を以てし、成功したので、その別當の關係からして上醍醐に經藏を造り、そこに宋版の一切經を施入した。その經藏は所謂唐様建築として注目されるべき遺構であつたが、近く山火のために焼失した。

室町初期に居つた三寶院の滿濟、秀吉の頃の義演等は政界の方面にも進出したので、その日記には政界の裏面を窺ふに足るべきものがある。

本寺は平安朝以來、常に相當の勢力を有して居つたのでその所藏する佛畫に頗る觀るべきものが多く、密教繪畫として他に類例稀なものがある。彫刻に於いても貞觀以來の代表的なものを有し、殊にその庭園は夙に海内に宣揚されて有名なるものである。

醍醐寺には有名な「秀吉の醍醐の花見」といふ事實があるが、何故に秀吉が醍醐をかくまで重んじたか。一つは本寺を中心とする山伏の利用、二には大阪と加能越との中間地としての軍事上の

必要に基づくものと思ふ。(中村)

醍醐寺靈寶館特別展觀目錄

(一)	醍醐根本僧正略傳	一	卷
(二)	僧綱牒斷簡	一	通
(三)	醍醐寺座主勝覺附法狀	一	通
(四)	醍醐雜事記卷第七(國寶)	一	卷
(五)	醍醐寺座主勝賢護狀	一	通
(六)	賢俊僧正日記(國寶)	二	卷
(七)	滿濟准后日記(國寶)	三十七	册
(八)	滿濟准后置文	一	卷
(九)	義演准后日記(國寶)	六十二	册
(一〇)	佛具(國寶)	五	點
(一一)	山水屏風	一	隻
(一二)	色紙貼交屏風	一	隻
(一三)	舞樂圖二曲屏(國寶)	一	隻
(一四)	紅楓圖屏風	一	隻
(一五)	金剛界大日如來坐像	一	軀
(一六)	閻魔天像(國寶)	一	軀
(一七)	吉祥天像(國寶)	一	軀
(一八)	阿彌陀如來坐像(國寶)	一	軀
(一九)	如意輪觀音半跏像	一	軀
(二〇)	地藏菩薩立像(國寶)	一	軀
(二一)	胎藏界大日如來坐像	一	軀

(二二)	求兒抄	一	帖
(二三)	祈雨日記	二	卷
(二四)	後冷泉天皇繪旨	一	通
(二五)	崇徳天皇繪旨	一	通
(二六)	金剛童子像(國寶)	一	幅
(二七)	仁王經法本尊(國寶)	一	幅
(二八)	不動明王像(國寶)	一	幅
(二九)	善女龍王像(國寶)	一	幅
(三〇)	不動明王像(國寶)	一	幅
(三一)	求聞持法根本尊像(國寶)	一	幅
(三二)	不動明王像(國寶)	一	幅
(三三)	孔雀明王像(國寶)	一	幅
(三四)	諸菩薩像(國寶)	一	幅
(三五)	三昧耶形(國寶)	一	卷
(三六)	四種護摩本尊並眷屬圖像(國寶)	一	卷
(三七)	十二天形像(國寶)	一	卷
(三八)	四家鈔圖像(國寶)	一	卷
(三九)	宋版一切經	五	帖
(四〇)	北畠顯家上奏文案	一	卷
(四一)	信濃書狀並日野俊基勘返狀	一	通
(四二)	萬里小路宣房奉後宇多天皇院宣	一	通
(四三)	吉田定房奉後宇多天皇院宣	一	通
(四四)	度會家行詩文	一	通

(四五)	佐山宮尊聖法親王消息	一	通
(四六)	華嚴經入法界品	一	卷
(四七)	大毗盧遮那經釋義	一	卷
(四八)	大唐西域記卷第十一、十二(國寶)	二	卷
(四九)	論語卷第七(國寶)	一	卷
(五〇)	江談抄(國寶)	一	冊
(五一)	諸寺緣起集(國寶)	一	冊
(五二)	狸毛筆奉獻表(國寶)	一	卷
(五三)	孔雀經音義(國寶)	三	冊
(五四)	法華經釋文(國寶)	三	冊
(五五)	多羅葉記(國寶)	三	冊
(五六)	嘉吉本指微韻鑑	一	冊
(五七)	佛制比丘六物圖(國寶)	一	卷
(五八)	閻魔天像(國寶)	一	幅
(五九)	虚空藏菩薩像(國寶)	一	幅
(六〇)	大日金輪像(國寶)	一	幅
(六一)	地藏菩薩像(國寶)	一	幅
(六二)	大元帥明王像(國寶)	一	幅
(六三)	大威徳明王像(國寶)	一	幅
(六四)	大手鑑	一	冊
(六五)	後醍醐天皇宸翰天長印信(國寶)	一	卷
(六六)	後花園天皇宸翰女房奉書	一	通
(六七)	後宇多天皇宸翰御灌頂諷誦(國寶)	一	通

(六八) 後水尾天皇宸翰 二 幅

(六九) 後奈良天皇宸翰般若心經(國寶) 一 卷

(七〇) 後奈良天皇宸翰女房奉書 一 通

(七一) 後奈良天皇宸翰女房奉書 一 通

(七二) 後陽成天皇宸翰阿彌陀經 一 卷

例會 九月三十日(土)午後一時半より陳列館第一教室に於いて開催、哲學科羽溪教授及び新歸朝の臨見高年氏より左の如き講演があつた。

佛教と民族 羽溪了諦氏

大乘佛教、小乘佛教の比較を論じ、民族の性質によつて、或ものは大乘を、或ものは小乘をうけ入れたものであるとなし、個々の民族について詳しく説明を加へられ、世界諸民族間に於ける佛教の分布傳播の狀況に關する平明な解説を與へられた。

イタリヤ雜觀 臨見高年氏

演題はイタリヤ雜觀ではあつたが、イタリヤ・トスカナ地方の中世・ルネサンス建築についてのべ、トスカナにはローマに見られる様なバジリカや又バロック建築は少なく、トスカナが最も活動した時代、即ち十二—十六世紀に至るコモネ(自治都市)の榮えた時代の建築が多く、したがつて教會建築に於てはロマネスク、ゴシック、及びルネサンス建築世俗的建築に於ては各コモネの政廳やルネサンスの富豪の邸宅が主なるものでフィレンツェ、ピサ、シエナに見るべきものが最も多い。而してトスカナのロマネスク建築はロムバルディアより學んだがその様式に於て大體地的

にフイレンツエのものトピサのものトに分けられ、前者はフアアードに柱列を以て裝飾するものが多くピサを始めルツカ、ピストイヤ等の町々がこの系統であるのに對し、後者は日と暗綠色二色の裝飾を基調とし時には更に多くの色彩を用ひ、ゾラト、エンボリフイエツレ等がある、又ゴシック建築にはシエナの大寺がこれでオルビエト大寺と同様にゴシックではあるがロマネスクの要素をのこし、裝飾も白、暗緑、淡紅等のボリクロームでありフランス、ドイツのゴシック教會に對し南歐イタリヤの藝術意欲の相違を示し、イタリヤはゴシックの地ではなくロマネスクの地であることを思はせる、又申世建築ことに裝飾に於てイタリヤはピザンツの影響を多くうけてゐるがトスカナでも建築に於ける裝飾的趣味にピザンツ的なものを見出すことが出来る。ルネサンス建築にはブルネレスキやアルベルチの美しい調和をこめた建築がフイレンツエの多くの教會ことにその内部に見られ又 Palazzo Stronzi, Pitti, Ricardi 等のフイレンツエ豪族の邸宅は切石をつみ重ねた重厚な水平感の強調されたもので、トスカナ世俗建築の代表的のものである云々として講演者撮影の天然色幻灯を使用しつゝ、説明した。

例會 十一月二十五日(土)午後一時半より、陳列館第一教室に於いて、御來講中の臺北帝大神田教授及び哲學科植田教授の左の講演を聞く。

元の大徳九路本十七史

神田喜一郎氏

金閣より飛雲閣へ

植田壽藏氏

西洋史讀書會

例會 昭和十四年九月二十八日、午後六時より、本年度第三回例會を開催。井上、岡島南先生を始め、參會者二十七名。

1. Lelehyre, G. 革命と農民

豊田 堯君

2. 伊太利の印象

鹽見 高年君

例會 昭和十四年十月二十六日午後六時より、於樂友會館第一號室、第四回讀書會例會を開催。原、井上、岡島の三先生を始め、十二名出席。

Georges pagès: Le conseil du Roi et la venalité

des offices

二回生 北川 三郎君

3. Hadzi の契約書を通じて

岡島誠太郎氏

大會 昭和十四年十一月三日(明治節) 午後一時於樂友會館、

讀書會大會も會を重ねる事茲に七回、秋將に清爽なる菊の佳節に當り聽講者は文字通り堂に滿つるの有様であつた。就中本會を飾るに九州帝大よりは長先生、東北帝大よりは大類先生並びに村岡哲、河部利夫の兩氏、本年始めて東京帝大西洋史研究室より林健太郎、堀米庸三、矢田俊隆の三氏の御來會を見た。更に亦十數名の女高師の學生諸氏は本會に彩を添へたのであつた。講演會はかくの如き盛況裡に六時半終了引續き同所に於て晚餐會懇談會に移り原先生司會の下に亦更に臺北帝大より菅原先生の御出席を得、大類、長、菅原の諸先生より講演會の話とは對蹠的に近世の御話を承はり亦東北、東京の諸氏よりも交々御話あり一同打とけた談

笑裡に午後九時半頃散會した、唯時野谷先生は御不例の爲御尊顔を拜する事が出来なかつたのは残念である。

尚講演會の司會は岡島先生に御願ひした。(出席者 講演會七一名、晚餐會三〇名)

講演の内容は大體左の如し。

開會の辭

文學博士 原 隨園先生
文學士 笹川新一君

Commutation 二就

Commutation が英國中世莊園制度に與へた影響の甚大さは容易に首肯される處であらう。即ち莊園制度下にあつて從來領主に對して隸屬民が負擔してゐた最も重き義務たる賦役及び現物貢納が貨幣支拂の形で代行されるに至ることは勞務賦役現物支拂の形態を根柢とする莊園制度にとつて根本的な變化を生ぜしめたのである。

英國に於ける地役勞務の貨幣代納化の例は可成り早期に於ても見出され得るのであるが、事實代納制は隸農小作人の狀態を改良する爲にはなく領主側の利益の爲になされたのであつて Commutation に關してはその事が金代納を要求し得る可能性の出現を意味するものに過ぎぬ事が注意されねばならぬ、従つて代納の出現そのものが直ちに物納賦役の消滅を示すと考へるべきではないのである。

併し乍ら貨幣代納が封建的な慣習契約に代行した時莊園制度の根元組織たる隸農制の經濟的基礎は破壊されざるを得なかつたのであり、地役勞務の消失は隸農民の法的特質をも殆どその實際的

な重要性を失はしめるに至つたのである。私は今この Commutation 進行過程を中世後期の英國に於ける新狀態の發展と相關しつゝ、主として隸農解放の觀點より眺めたいと思ふ。従つてその事は又 Manor system 崩壞過程の一つの觀察でもあるであらう。

ペトラルカ研究の問題 文學士 鎌見高年君

(1) 問題の提出

問題となる三著述

Eugen Wolf, Petrarca, Darstellung seines Lebensgefühl.

1926 (Goetz Beiträge)

H. W. Eppelsheimer, Petrarca. 1926.

A. v. Martin, Petrarca und die Romantik der Renaissance.

(Hist. Zeitsch. 138, 1928)

Wolf の命題—生活感情

Wolf, Martin の主張—ペトラルカの Romantik—非合理的な生活感情—彼の心的態度—「距離」「遠さ」への熱情—Distanzprobleme—Vita solitaria—古代—中世—そしてペトラルカの場合—新しき道世の意味—Vaucluse の生活—Ventoux 登山—古典古代への熱情—夢としミンヘルとして—rais としてではなく Irrational な生活感情より—精神、平衡、缺如。

政治的浪漫者—リエンツオとの關係—ゲルフよりギベリン宗教—「趣味」としての宗教。

ルネサンスと Romantik—ブルクハルト、Ruinen sentimenta-
lität—Bezold 新らしき道世—Weisbach—Martin (特ニ Sozio-

logie der Renaissance (1933) 中の Humanismus als Romantik und Restauration)。

(2) 駁論

H. W. Eppelsheimer, Das Renaissance-Problem (Deut.

Vjs. für Literaturwiss. u. Geistesgesch. 1933)

精神史は心理的問題ではない、—非合理的要素か理性的努力か—
Romantik の亂用—クラシックの理念—Klassizist—ルネサ
ンスの歴史の意義 (Klassizität, Rationalität, Anti-Metaphy-
sik, Autonomic)—彼が Petrarca 論—ラテン精神。

(3) 結論

ネトラルカに於ける Romantik 論のメリット—精神史的立場に
於ける Renaissance—Romantik の疑問—精神史に於ける時
期概念—Romantik 論争 (B. v. Wiese, Zur kritik des geis-
tesgeschichtlichen Epochenbegriffes. Dt. Vjs. 1933)—V. Kle-
mperer の書 (Petrarcas Stellung zu Humanismus und Rena-
issance. Herrige Archiv Bd. 141)—ネトラルカ研究とルネサ
ンス概念。

マキアヴェリ解釋に就ての一考察

文學士 高橋金也君

マキアヴェリはマキアヴェリズム即ち權謀術數といふ觀念によ
つて年久しく論評された、而して彼の思想は政治といふものが有
つ本質的な暗黒の一面を代表するものとして悪しき意味の現實的
政治家の典型と解された。

然し「あらゆる時代は神に直接する、あらゆる時代の價値はそ

れ自體の生の中に存する」と云つたランケ以來、マキアヴェリの
個性は彼の時代の必然性に於て解釋せられて來た、彼の思想は容
觀的な永久普遍の、例へば道德的の理念とは別に、特殊なそして
彼獨自の理念によつて解釋しなければならぬ。

私は彼の人間觀、歴史觀、宗教觀を通して、彼の個性と彼の時
代の個性との關係を考へて見ようとした、然し彼の思想を彼の時
代の政治から引離して考へることは出来ない、云はゞ政治に對す
る關心が彼の思想を特色づけてゐると考へた。

Römische Kolonat の起源と本質

文學士 井上智勇君

① 奴隸起源說批判

② Orient 起源說批判

③ Romani et germani 起源說

結論 Römische Kolonat 成立の意義

資本主義と個人性

文學士 鈴木成高君

私の述べようとすることは資本主義と個人主義との關係のやう
な社會學的問題ではない。個人性 (Personalität) は歴史に於ける
非合理的要素である。それ故にかゝる要素を出来る限り無視す
ることが歴史を科學にまで高める所以であると考へる傾向が存在
する。社會經濟史において此の傾向は特に著しく、例へば資本主
義は資本といふ物質の自己發展によつて生じたものであるかの如
く考へ、資本家といふ人間の要素は考慮の外におかれる。斯く考

へれば、經濟は物質の生活であつて人間の生活ではなくなるであらう。經濟の具體性を過度に強調することによつて却つて抽象に陥つたものといふべきであらう。ソンバルトの地代起源説の如きはその代表的な例である。それに對して Max Weber 以來説かれてゐる「資本主義精神」は問題の考察の上に新らしき光明を投ずるものではあつたが、然しそれは教會・教理といふやうな抽象的理論を以て資本主義精神と見做すところに未だ抽象學説たることを免れることが出来ない。然るに例へば Henri Pirenne の研究は資本からも資本主義精神からも共に離れて専ら「資本家」といふものを通して資本主義の歴史を考へることの可能性を示してゐる。資本家の *Personlichkeit*、それは資本主義の成立發展の上に如何なる役割を演じてゐるであらうか。それが目下の私の主たる關心である。

クラツシックの本質と限界

村田 數之亮君

—ギリシア美術史上における—

「クラツシック」の混亂。何が代表的ギリシア作品なるか(Homeros, Melanipides, Sophokles, Polykleitos, Zeuxis, Phidias, Lysippos) 従つて Parallelism の排斥。しかし Harmonia はギリシア美術の本質であるが、それは生命における調和平衡であるべきであり、従つてそれは一つの共同體を前提とする、かゝる共同體をば *Pericles* の時代に求め得よう。

ペルシア戦役のアテネ帝國に起つた自意識が傳統の對人の關係と調和した時代。主觀と客觀、Mythos と哲學的世界觀、人間と

自然とが一つの正しき關係 *εναρμονία* に齎された時代。これは戰役の *Kimon* の時代即ち Aischylos, Polygnotos 時代に初り、ペロポネソス戦役の項を以て終る。

閉會の辭

文學博士 原 隨園先生

例會 昭和十四年十一月二十七日、午後六時より於樂友會館第一號室、第五回例會を開催。原先生を始め二十名出席。

1. Karl Siegmund von Galena: *Voltaire und der antinationalistische Friedrichs des Grossen.*

二回生 加畑 一夫君

1. A. Doren: *Die Italienische Wirtschaftsgeschichte.*

二回生 富本 健輔君

地理學談話會

大會 十一月四日土曜、午後五時半より文庫部第八教室にて開催、雨天にも拘らず會衆同教室を埋盡す盛況裡に進行、諸種の關係あり懇親會を行ふこと能はぬ爲、講演中途にて休憩を宣して文學部新館中庭にて記念撮影をなし、後約十五分茶話會を開く。再開して夜十時に至り漸く講演終了するを得た。講演題目は左の通り。

閉會之辭

室賀 講師

分布的觀察の性質

中江 健氏

伊豫路 雜感

野澤 浩氏

地理學の實踐性

松井 武敏氏

北支那鐵道旅行談(幻燈使用)

米倉 二郎氏

滿洲國の民族

先志摩に於る二三の問題

長崎縣の家舟的聚落

交通地理から見た本陣

揚子江の船

山西省の開墾

明會之辭

島之夫氏

瀧本貞一氏

吉田敬市氏

和田篤憲氏

藤田元春氏

田中秀作氏

小牧教授

野澤氏、天災と農事の深き關係につき、伊豫路を巡つて見出される二三の問題を擧げる。東中豫の旱害多き地方では溜池等の技術により天災に對抗せんとする傾向が多いが、南豫地方は風水害を受けること多く、神佛の加護に依頼する傾がある。この場合南豫二七ヶ村を通じて見られる神明社とその神事伊勢踊に着目し、その起源につき若干の考察を試みる。

松井氏、現在地理學が實踐性缺除の外觀を呈する所以を尋ねて地誌的及通論的の對立の止揚を要請し、地理學に於る實踐性を規定して、現在世界の自然と人文の間に於る矛盾と調和を人類の理想を前提として明にし、以て人類發展の諸條件を追及することとする。

米倉氏、二十一枚の幻燈寫眞を使用して今夏旅行地の概況を説明特に北支の洪水地域を想定圖示し、その侵水地域の我九州に匹敵するであらうことを推す。

島氏、滿洲國の民族について、所謂五族の他の諸民族をも含めて、人口を中心としてその實狀を説く。

瀧本氏、先志摩旅行の瞥見を述べ、特に耕作景の特異性に注意する。即ち畑は周圍に黍を廻し、甘藷を主として粟、大豆の畝が交替して並列してゐるのである。

吉田氏、水上聚落が現在も九州沿岸、瀬戸内、南海道に残存するが、その顯著なるものとして長崎縣西彼杵半島西岸の瀬戸、崎戸を根據とする家舟聚落につき述べる。漁業を專にする原始的生活を營むが、近時陸上に居を構ふるもの出で、純粹なる家舟生活を維持するもの六十八世帯中三十五世帯。彼等が外來民既であるか、原住民族の殘存であるか、不明であるが、家舟由來書等の文書に、文明六年大村純伊が有馬氏と計つて敗れたを匿ふたゝめ、爾來大村侯の庇護する處となつた瞥見へる。

和田氏、地理的制約を受くること大であつた封建時代の道路とその交通施設たる本陣について、西國街道をとつて述べ、西國大名の通行路としてこの街道が京大阪を避けてゐる所以を以て結ぶ。

藤田氏、揚子江は支那に於る河海舟行の搖籃をなしてをるものであり、而してその舟は底平船即ちヒラタ舟であつた。華夷通商考にも長崎に來る南京船と云ふは此河舟を直に乗出し來る也。此故に舟の造りやう底平く長き也云々とある。古代以來日支の交通といふものはかゝる扁舟によつて自在に行はれたもので何等龍骨を有する大船を要しなかつた、逆針を示して日本航海術の優秀を説く。

田中氏、山西モンロー主義の根據はその位置と地形の隔絶性孤

立性及びその天産の豊富にあつた。岡錫山の省政建設十ヶ年計畫はしかしながら仔細に見るときは更に合理的開發が要求され、しかも又モノロー主義はその閉鎖主義の故に缺陷を來すといふ矛盾を生んでゐる。

例會 十二月九日(土)午後一時半より、實習室にて。出席者、二十三名。

一、延長風土記に就て

室賀 講師

一、本陣に就て

和田篤憲氏

地理學教室秋季旅行

十月十日小牧教授木村副手引率二回生二名飛彈白川へ出發。東海道を岐阜に至り、高山線にて美濃太田、更に越美南線を利し白城線バスにて牧戸に着す。第二日早朝バスにて白川郷に入り、御母衣にて遠山家を見學す。家族十六人は五階建の一階のみを占め、他はすべて養蠶室、乾燥室等に充用されてをる。徒歩にて萩町に至り泊す。秋祭の豫行を見る。第三日は徒歩にて西赤尾まで強行、途中椿原にて大宅氏宅の天地根元造の小屋を見る。第四日下梨までトラツク、徒歩にて祖山を經、大牧温泉に至る。夕刻庄川を小牧に下る。青島、高岡を經富山に入る。翌日解散。

東洋史談話會

第四回大會 十一月五日(日)午後一時半より樂友會館講演室に於て講演會を開催、講演時間は一人二十分宛であつたが、終りの

四氏は時刻の都合上十五分であつた。聴衆約八十名、若き女性十數名の來聴もあり、また場内には、田村實造氏等の齎した滿洲ワールンマンへの壁畫模寫、遺物等の展觀あり、盛會であつた。午後六時半より大食堂に於て晚餐會を開催。羽田總長以下數名のテールブルスピーチあり、學會のあとらしい興奮を感じながら散會したのは八時であつた。講演者及演題左の如し。

開會の辭

宮崎助教授

漢代に於ける奴隸

小畑龍雄氏

明史烏斯藏傳の二三の地名に就いて

佐藤長氏

北魏平城遺址

澄山正一氏

後魏朝地方政治の實際について

岡田芳三郎氏

唐代聘財に就いて

岡本午一氏

回部の源流に就いて

羽田明氏

全真教成立の一考察

野上俊靜氏

三代の五伯に就いて

佐藤一雄氏

競渡と張燈

長部和雄氏

清初鄭氏の亂と朝鮮

浦廉一氏

魏晉佛教の展開(本誌前號に掲載)

塚本善隆氏

素畫に就いて

神田喜一郎氏

明代蒙古に關する史料二種

和田清氏

開會の辭

那波教授

第六十六回例會 十月十三日(金)午後七時、百萬遍鎗屋に於て開催。

北支旅行報告

本石 獨芳氏

支那旅行談

那波 利貞氏

第六十七回例會 十一月二十四日(金)午後七時、樂友會館に於て

「神田先生に物を聴く會」を開催す。

讀史會

例會 十月四日(水)午後六時より、樂友會館第五號室に於いて、神道史講義の爲め來學中の清原貞雄博士を園み同氏にものを聴く會を開いた。氏は學界に於ける半生を回想して體験談を語られ、西田教授以下の出席者により諸種の問題も討議されて打算いだ座談に歡を盡した。

大會 十一月四日(土)午後六時半より、樂友會館講堂に於いて開催、出席者約百名、左の如き講演があり、最後に西田教授の發議に依り、本會創立當初の功勞者にして最近物故せられた栗野秀穂、牧野信之助兩氏の靈に對して默禱を捧げ十一時前會を閉じた。

一、近世神道史上に於ける吉見幸和の學問的地位

清原 宣雄氏

中世社會の精神生活を占めた支配的理論であつた佛敎は、近世に入ると共にその支配的地位を儒敎に譲つたのであるが、近世神道史の上から之を見るに、その本質的な契機によつて大別する時、我々は全體に於て二つの主要な流れを有つと云へる。即ちその一つは從來の兩部神道の影響を離れて、儒敎と神道との合一、或は儒敎による神道の解釋がそれで、具體的に云へば、儒學者の儒家

神道、吉川惟足の吉川神道、山崎闇齋の垂加神道、度會延佳延經父子によつて再編成された伊勢神道等であり、此等の神道は儒敎精神との一致によつて、幕府の封建的支配、現狀維持の爲の武士道的儒敎佛敎神道の全道學體系の理論となつたのである。他の一つは、かゝる儒敎との結合に反對し、道學的煩瑣なる束縛を「唐ごゝろ」として排撃せんとした思想、即ち復古神道がそれである。

吉見幸和は延寶元年名古屋三ノ丸東照宮祠官の家に生れ、垂加流の神道を正親町公通に學び、その他淺見綱齋、度會延經、壺井義知、中院通躬、梁木桂齋、玉木齋齋、高田未白、淺井重義等にも師事し天野信景とも親交があつた。故にその學は頗る博く、神道有職より國史官牒に互り、從つてその著す所も非常に廣範圍に及ぶが、之を大體三つに分つ事が出来る。即ち、一は神代卷及中臣祓の講義、二は伊勢神道及吉田神道の如き中世佛敎神道への辨、三は葬祭略式服忌令等有職の説及其他の神道上の雜説である。

而して彼の學的態度は、文獻學的乃至考證學的價值を主張するものであつて、かゝる文獻學的方法を用ひた學派は即ち上代の闡明を上代人の傳承記載によつて行はんとした國學であるが、幸和は未だ中世的態度を脱却しえない垂加神道より出て、その理説を尊信しつつも同時に文獻學的方法を採用して、新たな國學へと移行する過渡期に位したのであつた。而して彼がかゝる學的態度の下にその第一の研究の對象となしたものは中世的理念によつて構成された伊勢神道及吉田神道であつて、「玉部書說辨」「五十鈴川記」「僞妄辨論」「宗廟社稷問答」「増益辨抄俗解」等に於て、そ

の妄を徹底的に非難して居るのみならず、享保年間には尾張の稻荷社及自己の東照宮に關して吉田家と争ひ、遂にその搦腕を脱するまでに至つて居るのであつて、その中世神道への批判の激しさは、後の國學者の著した、眞淵の「外宮考」や、宣長の「二宮割竹の辨」篤胤の「俗神道大意」等も文獻學的方法には上述の書より一歩も出て居ない事によつても明かである。勿論彼はかゝる學問的立場の上から否定の對象たりし中世神道に對して、それが否定に急なるの餘り、その歴史の意義を忘却し、神道に於ける宗教の本質の批判に徹せず全く單なる文獻學的機械的否定論に止つた缺點はあつた。しかしそれも次に來る國學が儒教佛教神道へ果敢な批判を加へ乍らそれは何處までも抽象論に止り、かへつてその反面一層低い宗教性に陥り、遂に復古神道なる神道に歸したのと考へ合せて興味ある事實と云はなければならぬ。

しかるに「神代正義」「國學辨疑」等に見ゆる彼の古代史研究を一言にして云へば歴史の立場に立つものと云ふべく、古代人の傳承乃至認識は何等具體的考證を経ずしてすべて事實か又は眞理なりとされたのであつて、そこには彼が中世神道に加へた文獻學的批判の眼は全く閉じられ記紀の記載が沒批判的に承認された事を見るのである。

併し乍ら彼のかゝる文獻學的方法の放棄は、かの國學の古代研究が、上代絶對の爲の復古ではなく、中世的極權打破の爲の古代研究であるが爲に、中世的封建的束縛から脱せんとした點では幸和と全く同じであり乍ら、國學に於ては遂にその古典への批判を

封する事の上に止らず、更に進んで本來固有の教理のない記紀の記載を所謂神道として説かんとした態度とは全く異なるものである。

即ち彼の古代史研究の立場は、前述の儒學者の試みた哲學的であり乍ら中世的要素を有した解釋と、後の國學の神學的傾向、即ち宣長の「賊或悔言」や篤胤の「古道大意」に見られる主觀的主張との中間に位するものであらう。

要するに彼は垂加流の學派から出て、しかも純客觀的文獻學的學風によつて中世的封建的道學に對する解放を試み、それよりして中世神道を攻撃し更に古典への歴史的解释を企てたのであつた。勿論その兩者の間に明かな矛盾を見出すが、その矛盾は後の國學がやはりその内に藏して居たものであり、しかも國學は同様に文獻學的方法より出發し乍ら、遂にその客觀的立場を放棄して再び神學へ逆歸し、主觀的主張をなすに至る事を考ふれば、幸和の學風は當然國學の先驅をなすものであつて、近世初期の儒學神道より國學へと移行する、過渡期としての幸和が近世神道史上に有する學問的地位は注目されなければならない。(清原)

一、本地垂迹説の生成

小田 泰 正氏

他の如何なる時代でもなく平安末期より鎌倉時代にかけて一定の時代に、そして他の如何なるものでもなくたゞ佛との關係に於て神々がその垂迹と考へられるのは何故かといふ問題を考へてみたいと思ふ。

平安朝人は現世の存在を「宿世」によるものと考へ、人間存在は

「佛神に擬てられたもの、天地にうけられ又疎んぜられる事によつて左右されるものと考へてゐた。それは如何なる家に生れるかといふ事によつて殆んど全生涯を限定され自らの力を以て自らの運命を展開し得ない、宿命に縛られた存在の仕方即ち人間観であつた。かうした存在様式は、この世に許された最も悪まれた存在が藤原氏に限られ、更に北家にそして御堂關白の一身に極まつた時最もあらはになるものであつた。人々の運命が固定し、そして道長の上の人々はこの世に人間に與へられ得べき運命の全貌をみたのであるから、人間が享受し得べき運命の極限に達した時、世は最盛期であると共にその裏は直に世の末であつた。此世の末の觀が、「世の中ともすればいと騒がし」き當時の世情と相俟つて、末法思想と結びつき、往生思想が強まると共に、佛の世界の裡に佛の光に照らし出された人間に理想的タイプをみつめ、人生の現實を佛の光の照射の下で眺めんとする意識が動き出してくる。

公家の世の常態は後三條天皇以來崩れ始め、院政の開始、武家の進出、保元以來繼起する戰亂と過渡期の動搖の直中に漸次激しく世は變動してゆくと共に、從來の人間の在り方が崩され、過渡期の精神的不安は末法に豫言された三災七難の社會的不安と相俟つて往生思想が深化し、往生傳が盛に書かれては新しき人間の在り方を神話的に示さうとする。

平安後期に又人生の現實に歸り現實の人間相を直視せんとする動きが強まつて來る頃であつた、今様雜藝時代の現出はそのあらはれであり、大鏡以下鏡流史學の叙述精神はさうした意識に促さ

れたものであり、云ふまでもなく鎌倉藝術は即實的な意欲を現してゐるし、聖、沙彌等の行動は形式化した佛教を人生の現實の上に再建せんとするものであつた。

かうして新しく見直されんとする人生の現實が往生佛國土を理想とする心から新なる意義を與へられんとする時、「眞俗二諦」が新しき時代の理念として望まれるのであつた。狂言繪語の戯れも第一義諦に歸すといふ文學觀、和歌を日本の眞言とする歌論はかうした動きの中から生ずるものであり、その他の漢能も何等かの仕方によつて佛道の中に攝取されんとし、又三教の問題が新に考へ直され、全て人間話がさうした新なる時代理念の下に反省されてくるのであつた。早くから佛との關聯に於て考へられてゐた神々が又かうした動きの中で改めて考へ直されねばならぬのであり、神觀念の傳統はもう一度ときほぐされた後に、佛教そのものが持つ本地垂迹思想に確かな理論的根據を見出し、日本國家の特殊性そのもの、中に理念として望まれる佛の世界を神々を通して見出してゆくのであつた。

なほ本地垂迹説の生成を考へるにあつては、武士の進出によつて變革した社會的現實に即して體驗的に深まる衆生平等觀、本覺思想、又當時の社會混亂により目ざまされる國家意識等の問題が考慮されねばならない。(小出)

- 一、佛教の傳來と其の受容 松本 解雄氏
- 一、神道五部書に就いて 内藤 晃氏
- 一、祭祀に關する遺蹟遺物 佐藤 虎雄氏

一、神皇正統記 魚澄惣五郎氏
 一、朝鮮史の性格 三品 彰英氏

右五氏の講演は追而本誌に全文掲載の豫定につき梗概を略す。
 例會 十二月四日(月)午後六時半より樂友會館第六號室に於いて
 開催、西田教授以下三十餘名出席、左の如き研究發表を行ひ十時
 半過閉會した。

一、東北旅行報告 二回生 大石 良材氏
 一、中世後期の商業に於ける二三の考察

一、法 然 教 攷 三回生 遠藤 祐 正氏
 三回生 竹田 聰州氏
 一、妙貞問答に就いて 文學士 岩城 隆利氏

京都市史編「皇室と京都」特別展觀並講演
 纂創始記念

京都市に於いては紀元二千六百年記念事業の一として京都市史
 の編纂を發企し昨年四月以來西田直二郎博士を編纂主任に、本庄
 榮治郎、中村直勝、猪熊信男の三氏を顧問として、着々その稿を
 修めつつあるが、昨秋これが創始記念として十月三十一日より十
 一月三日まで四日間岡崎公園京都美術館に於いて「皇室と京都」を
 主題に史料の特別展觀を催した。會期中には高松宮殿下、久邇宮
 妃殿下が蒙臨あそばされた外、連日入場者五六千に達しこの種の
 展觀としては未曾有の盛況を呈した。

陳列は御歴代宸影並に宸翰、市民の忠誠、京都の繁榮の三部に
 分れ、第一部にあつては桓武天皇以來孝明天皇に至るまで京都に

關係ある御歴代の中現在信憑すべき御尊影の傳へられてゐる御三
 十七代に就いて悉くこれを奉掲し、併せて同じく京都に關係ある
 御歴代の宸翰約五十點を拜展した。就中御尊影にあつては古く過
 つて海外に流出し前年獨逸總統ヒットラーより御府に獻せられた
 嵯峨天皇の宸影と、從來多く唯森寛齋の模本によつて僅に原本の
 趣を偲ぶの外なかつた爲信筆御歴代天皇宸影圖卷の二點が特に御
 貸下によつて拜展せられたのをはじめ、根來大傳法院の鳥羽天皇、
 妙法院の後白河天皇、大覺寺の高倉天皇並に後宇多天皇、長福寺の
 花園天皇、大徳寺の後醍醐天皇等その名の既に著聞するもの、外
 特に泉涌寺に藏せられる四條天皇以下孝明天皇に至る近世十餘代
 の御尊影をも加へて殆ど現存する限りの御歴代の御肖像が悉く一
 所に奉掲せられたことは全く未曾有のことであり、奉拜者に對し
 非常な感銘を與へた。宸翰としては後白河天皇以來御一代一點の
 標準を以て集められ、これまた南禪寺の龜山天皇御起願文、東寺の
 後宇多天皇御奉書、靈洞院の伏見天皇讀漢書詩、大徳寺の後醍醐
 天皇宸翰、三寶院の後奈良天皇般若心經等特に著名なもの外、
 近時新に重要美術品又は國寶に指定せられた中村直勝氏藏の後光
 嚴天皇御製漢詩、岩井武俊氏藏の後陽成天皇玄上御覽書寸法、或
 は勸修寺伯藏の後光明天皇御日課之事の如き、御歴代の御聖徳を
 仰ぐに特に尊く拜せられた。

第二部市民の忠誠資料としては、和氣清麻呂、空海、菅原道真、
 東嶽慧安、萬里小路吉田北畠の三房等の事蹟を傳ふる文書繪畫等
 を別とし、寶隆公記、言繼卿記等の如き日記と、立入宗繼、並に

川端道喜關係の文書が特に注意を惹いた。

第三部京都の繁榮を傳ふる資料としてはまづ塚本正一、丹羽圭介、松浦三郎兵衛、木村捷三郎等諸氏の藏する、平安京大内裏遺瓦と九條公府家藏延喜式卷四十二、史料編纂所々藏拾芥抄古抄本、伊藤快彦氏所藏内裏八省宮城京中指圖(寛正二年寫)等がいづれも平安京當初の規模を考見する上に見逃すべからざる資料として特に専門學者を喜ばせたが、それらよりも更に一般市民の興味を惹いたのは室町末より江戸中期にわたる所謂時代屏風の洛中洛外圖であつて、三條公府家、池田侯爵家、伊丹岡田利兵衛氏、京都杉浦三郎兵衛氏、東京帝室博物館、大阪市美術館等にそれ々藏せられるこの種屏風の遺品を殆ど網羅したかの觀があり、更に吉川觀方氏所藏の風俗屏風數點をも加へて優にそれらのみを以てしても一回の特別展觀に値するものがあるかに感ぜられた。

尙會期中十一月一日夜、市立堀川高等女學校講堂に於いて、展觀に因む左の如き講演會が催され、一層市民の關心を呼んだ。

京都市民の忠誠	市史編纂員	柴田	實氏
御歴代宸翰	市史編纂顧問	中村	直勝氏
皇室と京都の發展	市史編纂主任	西田	直二郎氏

國史專攻學生 東北地方及東京見學旅行記

昭和十四年十月十四日、午後九時四十四分京都驛發の東京行意行に身を投じ、一路、仙臺まで長驅せんとする意氣込みを寢臺車に横たへて東に向ふ。行を同じうするもの、藤助教、稻葉助手、

以下九名、上野驛からは東伏見講師も御参加になつた。

第二日(十五日) 午前七時四十四分、在東京の諸先輩に迎へられて、東京驛に着く。構内食堂で朝食をした。めて後、自動車に分乗して、宮城並靖國神社に参拜、午前十時上野驛から仙臺へと再び車中の人となる。ごつたかへす過員の裡に汽車は關東の平原を過ぎ、那須野原を横切つて奥羽に入る。郡山にて、折柄東北地方御旅行中の照宮様の御召車が連結され、沿道に驛に、國旗を手に奉迎申し上げる人々の美しい姿は、例年ない豊作に樂しむ農夫の姿と共に、明るい東北地方といふ感じを我々の心に植付け、そして、この印象は旅行中を通じて滲る事なく、後になるにつれて更に實證され裏付けられもして行つたのである。

午後四時三十四分仙臺驛着、東北帝大國史研究室の方々に御出迎へを受けて、自動車で大學に向ふ。教官食堂で夕食の御饗應に與り、それより、古田教授以下の御案内で陳列館に入る。陳列品は大別して、考古學資料と、土俗研究資料とに別れ、前者は當地方及北海道樺太にかけての出土品で、繩文式土器時代の蝦夷地文化を語るものが大多數を占めるが、更に近時仙臺飛行場擴張工事中發掘された土器で彌生式のもの、合口壺で繩文彌生混合文化の時代と推定されるもの等があり、後者は、アイヌ、ギリヤーク、オロツコの裝身具、裝飾品、日常生活用具、祭祀用具等が陳列せられてあつた。國史研究室では、探訪謄寫された郷土史關係の文獻——津輕史、風土記御用書出、漫筆風土年表五十二册等を見せて頂く。夜も既に更けたので東北帝大の方々の御厚意を謝しつゝ、

辭して境屋旅館に入る。

第三日(十六日) 仙臺瑞鳳殿、大崎八幡、多賀城址、高崎廢寺址、松島、瑞巖寺、鹽釜神社。

午前八時半旅館を出て、瑞鳳殿に向ふ。門の中まで入る事が出来た上案内のユーモラスな説明に顔を解いた。それから又、大崎八幡へ、桃山時代権現造りの社殿、内部の裝飾に目を瞠る暇もなく急遽仙臺驛へ自動車をとばす。古田教授はじめ昨日の方々、わざ／＼驛まで見送りに来て下され、尙且つ、内藤、大島の兩氏は多賀城址及び高崎廢寺址まで案内の勞を執つて下さつた。多賀城で汽車を降り、田舎道を、あの上が多賀城址であると言ふ丘陵をめざしながら歩む。行きかふ農夫の野良姿も風變つて面白い。途中、多賀城址の出土品の蒐集家として有名な菊池三彌氏宅を訪問、出土の古瓦、多賀城圖面等を拜見、辭して城址に向ふ。殘壘あり、土壇あり、礎石あり、有名な多賀城碑は南方にあり覆堂が建てられてゐる。それから、丘陵の中を縫つて高崎廢寺へ赴く。途中二、三箇所古瓦の落ちてゐるのを觀た。塔址は高い基壇の上であり、礎石を遺し、金堂、講堂の址は林の中に在る。小春日和に映える漆、ぬるでの紅葉に、關西より一歩先きに見る東北の秋色を賞で、電車の多賀城址驛に出る。こゝで、東尊の内藤、大島兩氏とお別れして松島へ向ふ。

松島の景を前にして、桃山城遺構襖繪は山菜の觀瀾亭で仙臺驛から長途を野越え山越え運んで來た辨當を食べる。瑞巖寺へ行つたのは照宮様御成り直前の事として、掃除に忙しい所を、特に拜觀

を願ひ、廊下より内陣を拜するのみではあつたが、それでも、本堂、玄關、庭園にその氣宇を窺ふ事が出来た。寺を出、松島五大堂を斜に見て、又電車で鹽釜神社に向ふ。神社は鹽釜の町の背後山上の遙かに松島の景を眺める形勝の地にあり、江戸時代藩主伊達氏の崇敬篤く、従つてその規模も大きい。

鹽釜から汽車で岩切に出て、更に一ノ關に至つて宿泊する。
第四日(十七日) 平泉中尊寺、毛越寺

六時起床、杉の坂道を平泉驛から自動車で中尊寺の下まで行く。登ることしばらく、西方には北上川長くゆるやかに流れ、その向ふに駒形山、櫻山を前にして東稻山が聳えてゐる。北の方を望むと、衣川細くうねつて北上川にそゞぎ、丘陵を以て北方を限る。今は昔、王朝文化の遠く花咲いた山河を一望して、坐るにそのかみの佛を偲んだ。

本坊に小憩の後、住職の案内で講堂を見學する。

金色堂 經藏、圓伽堂丈六、鎌倉期、辨天堂、最勝王經十界

寶物館 大日如來坐像、木像、一字金輪、千手觀音堂、千手觀音立

藤原 白山社 辨慶堂 本坊本堂 彌陀、鎌倉期

文章に讀み、寫真に見てゐた諸堂、諸佛及び堂内の莊嚴、什物

等も、今更ながら實物に觸れてうれしく感ぜられた。三代の榮耀は國破れて在る山河に、經て來た歲月と風雨に光耀せて、悲しくも美しく遣り、彌陀光嚴永劫の願を久遠の今に顯はす。

中尊寺を出、又、自動車で毛越寺に向ふ。運轉手にどう讀む

のかと尋ねると、「モウチユウツ」と高音に教へてくれた。車裡で晝食をすまして後寶物館を拜観し、昔の寺址を見學する。南大門址に立つて望むと、前に大泉池が中島をうかべて東西に長く、芝生や塔山の松の緑も美しい。重森三玲氏湖景の地圖を見せて頂く。嘉祥寺、講堂、圓隆寺の址は土境礎石を遺し、雨垂れ落ちに敷いた石をたどつては廻廊も、將又、鐘樓、鼓樓、中門、經藏のあとも指摘し得て面白く、今は無き七堂伽藍を心に思ひうかべ、そのかみの姿を池にうつし見つ、しばしは時の立つのを忘れた。

照宮様平泉御着の直前、午後一時四十六分平泉驛を出、仙臺を経て、山寺に向ふ。長きに於て日本第三の面白山トンネルを過ぎて山寺の驛についたのは午後六時四十四分。山形から柏倉先輩がわざ／＼一行を出迎へて下さつた。山寺ホテルに泊る。

第五日(十八日) 立石寺、上杉神社、松岬神社、米澤圖書館

昨夜頭上高くに望んだ灯は今朝起きて眺めると河向ふに迫つてゐる樹の多い山の中腹に隠見してゐる御堂の燈明だつたことを知る。先づ根本中堂に參詣し鎮守を拜み山に登つて開山堂、五大堂、如法經所碑、經藏、如法堂を巡る。立石寺は慈覺大師の開基と傳へてゐるが此の寺の如法經の信仰は慈覺の流を汲むものであらうか。歸途本坊に什寶を拜観する。山寺の凝灰岩を穿孔した奇峭は松島と對比される。此處から面白山を望むのも佳い。山形で乗換えて米澤に向ふ車中沿線の山裾迄延び擴がった稲穂の波濤に豊饒の秋色を嘖嘆した。是は久しい間遠くより東北を考へてゐた想念と背馳する。併し眞に悦ばしい豫想外れだ。けれども米澤驛で早

くも除雪車の鋼が陽を受けて鈍く光つてゐるのを見た時覺め度くない現實に觸れた様な氣がした。板屋峠を越え惱む列車に坐しても高原の美を賞する心持は赤雪の深さをも推量するのである。米澤では上杉神社、松岬神社に參拜し禱照殿にて縁藝種智院式並序一卷共の他多數の武器を觀て圖書館に向つた。終日柏倉先輩のお骨折により落着いて見學することが出来た。夕食は郡山驛での蕎麥の立喰ひだ。松山村々長小澤平八氏が途中迄出迎へられた。明日の案内をして下さるのである。東山温泉で初めて疲勞と心細さを沐ひ落して元氣が出てくると仲々眠れないで夜更しをした。

第六日(十九日) 宗英寺、若松城址、勝常寺、塔寺、心清水八幡宮、柳津虛空藏

今日は自働車で會津平野に散在する寺々を園遊を索めて駆廻るのである。最初に市内の宗英寺で木彫の薩名盛氏坐像を見た。若松城址を通り抜けて市外に出る頃より霧が霽れ上つて磐梯山が雄容を現はしてくる。多くの村を通り過ぎて勝常寺に到る。碧空と老杉を背景にして會津中央藥師堂は茅葺の屋根も鮮かに反轉して軒の組物の簡素な素木と調和してゐる。此の堂の中に藥師如來以下の弘仁の群像が安置されてゐるのである。劬い刀法に習練の母と信仰の熱が潜んでゐる。盛上つた口唇額の狭い顔面に意力が漲つてゐる。特色ある衣文も凝滞がない。東伏見先生は「勝常寺の多くの佛體によつて、我々は僅かにこの地方の平安朝の文化が、どの程度にまで進んで居たかを知り得るのである。人なき里に寺を建て、佛菩薩像を安置することは決してない。寺の作られる所、

それは既に寺の存在を必要とする社會が存在する所であり、少くとも何人かの努力がその社會の文化的生活を、寺院を必要とする迄に高め得る可能性のある所である。しかもそれが弘仁時代の寺院である以上、そして十二體の弘仁佛が現存する程度の大寺院である以上、この地方の社會生活が如何に高いものであつたかを想像することが出来る。」と謂はれてゐる。塔寺に於ては二丈八尺の

千手觀世音菩薩の巨像に驚く。隣接せる心清水八幡宮では長帳四卷を營た。更に道は岫端に沿うて上下し清流を見下す高樓で壺食をして後柳津虛空藏に詣り奥院の辨天堂を觀、再び自動車之急がせて廣田驛に汽車を捉へ磬梯猪苗代を振放け見つゝ一路上野を指して南へ戻る。豫定より遅れて晚く東京に着いたが在京の先輩は再び大勢で出迎へて下さつた。日本青年館に泊る。

第七日(十月二十日) 帝室博物館、國分寺、深大寺

東京見學第一日は先輩鍋島直康氏に導かれて八時頃出發上野の帝室博物館に赴き、先づ染織部の陳列品を三條西鑑査官の御説明によつて見學した。同部は二室に分れ奈良時代の綾、錦、絨、氈、羅、江戸時代の小袖、打掛、能衣裳等が染織技術の見地から多數出陳されてゐる。懇切な御説明によつて新方面の視野を開きえた事を喜び乍ら階上繪畫部に移りこゝでは秋山鑑査官に説明して頂く。

最初に丁度特別展中の御物の唐代禪月系の十六羅漢像(絹本着色十六幀)を拜觀した、線描を本位に陰翳をつけ、急所を抑へて彩色してある點等洋畫の手法を思はせ顔の皴、岩石、衣の襞等を力強い長い平行線を大膽に用ひて些も不自然を感じせぬ。猶

隣室には平安から鎌倉にかけての羅漢畫が七八幅かけられ、唐風から大和繪の物優しい表情に移り、更に鎌倉の人間の、寫實的描法に移る過程を如實に示してあつた。

次の二室には室町、桃山、江戸の各時代、各派の優品を集め最後の室では御物南蠻屏風を拜觀した、金箔地に描かれ、永徳の風を存しすべて暢びんとし殊に人物が極めて大きく出てゐる等當時の精神の豊に流露したものである。

更に慶長年間の洋人奏樂圖屏風が日本繪具でよく洋風の氣分を出してゐる手法に驚歎し乍ら博物館見學を終へた。午後は中央線方面に近郊の史蹟を探る事とし、先づ國分寺を訪れる。こゝで時野谷先輩が先に來て待つて居られた。現在の國分寺は甚だ貧弱なものである。正中三年の板碑拓本寺址出土の古瓦等を見た後、寺址を探つた。寺址は丘陵と低地に亘り南大門は低地に、金堂、講堂はやゝ高く再び低地を隔てた丘陵上に北院址があり、塔址は金堂の東南にある。北院の礎石は大部分散逸して舊規を偲び難いが講堂、塔の礎石はかなりよく遺つてゐる。京王電車の府中驛まで出る道は佳しい武藏野の秋を心ゆくばかり味はせた。調布に下車した時は既に日も昏れ果て、急仕立のハイヤーを動員して深大寺を訪ふ。本堂内脇の間の厨子の中に有名な國寶釋迦如來倚像を拜觀する。豊麗な双頬にふくよかな微笑をたゞへ肩から鼻筋への線がすつきりした弧を畫く明哲な顔容を飽くことを知らず眺めた。其他永享八年、貞治六年の刻銘ある板碑や深大寺昌樂院緣起等を見て、今日の見學を畢へ、夜は青山四丁目の青柳にて藤井甚太郎

先生を初め在京先輩諸氏の歓迎茶話會に臨み、種々お話を伺つて宿舎に歸つたのは既に十一時頃であつた。

第八日(十月二十一日) 宮内省圖書寮、東大史料編纂所、九條公

爵家、池田侯爵家

今日の見學は宮内省圖書寮に始まる。午前九時乾門東の北詔橋から舊本丸に參入、圖書寮に至り樹下快淳氏の御説明を聴き、別室に特に陳列して頂いた貴重な典籍文書等を拜觀した。正面には後鳥羽、後醍醐兩帝の宸影(摹本)を拜する。數々の陳列品の中、若干を拾つて見ると。

一、貞親政要

慶長本、木活

一、元亨釋書

奥書 大藏經印板共行一部計三十卷 峯貞治

三年甲辰正月日謹題

一、類聚符宣抄

弘安本

一、看聞日記

卷子本、紙背百韻連歌

一、源氏物語

御奥書 以三條西家傳之證本合勝寫了

慶長十九稔仲春中瀟

從神武百餘代孫太上天皇(御花押)

この他靜寛院宮の文久元年十月の御東下以後の美はしく刻明にお誌し遊ばされた御日誌を拜見し、又嘉永頃より盛に活躍した幕臣で外交に高い識見を持した川路聖謨の日記その他の遺稿を見た。殊に烈公の彼に對する書翰に「一昨日は於營中御面談、大慶毎度風節凜然候、國家安堵此事候云々」とあるのは烈公が如何に彼に傾倒したかを知るに足る。宏大な書庫を駈足で一巡其の保存

法の行届いてゐるのに感心し、諸外國献上本の豪華な装幀に驚いて圖書寮を退出。次は東大史料編纂所に赴き、伊木、高柳、岩橋の各編纂官の御説明で同所の事業内容及びその成果の一端等を資料について見、終つて正午構内食堂に於いて東大國史科學生

諸君に依る交際午餐會に出席、龍、中村、板澤の諸先生方以下御一同より鄭重なる御歓迎の辭を頂き御厚情に深謝しつゝ一時前大學を辭し、再び鍋島先輩の御案内によつて赤坂福吉町の九條公爵家に至つた。公爵御自身の御應接に預り同家文書整理中の田山信郎氏の御説明で貴重な家寶を多數拜見。中にも正親町天皇宸翰女房奉書蘭香待之事は御當家にて拜することにより一層の感激を覺えた。その他貞信公記抄、九條師輔公御記、忠通自筆消息案、皇嘉門院御愍處分狀並後白河法皇勅答藤原定家申文、弘仁格抄、延喜式(紙背實龜四年太政官符)、中殿御會圖等何れも珠玉の優品に非るは莫かつた。同邸を辭し、最後に原宿の鳥取池田侯爵邸に參りこゝでは雄渾なる八幡太郎繪詞三卷を仔細に觀、多大の眼福を得て此處に本旅行の見學を全部終了、一同銀座に出て夕食をとり多數先輩のお見送を受けて午後八時三十分東京驛發一路歸洛の途に就いた。終りに臨み今回の見學旅行に際し多大の御高配を辱うした各地の官衙、學校、圖書館、社寺其他諸家の方々に対し深甚なる謝意を捧げたいと思ふ。(服部、大石、十河)

支那學會

十一月四日(土)午後一時より文學部第七教室に於て開催。

西廂記に就いて 入矢 義高氏
 六朝時代の祠廟 宮川 尙志氏
 支那古代慈惠政策に就いて 笠原 伸二氏
 穀梁傳に關する二三の問題 重澤 俊郎氏
 漢初の五行思想 木村 英一氏
 重念と輕辟 倉石武四郎氏
 百姓僧致 那波 利貞氏
 文藝論に於ける虛實 青木 正兒氏

東方文化研究所公開講演會

今期に於ては左の如く開催。會場はすべて同所講堂である。

九月三十日(土)午後一時半

近世支那に於ける都市と農村

佐伯 富氏

支那文學の特質

吉川幸次郎氏

十月十四日(土)午後一時半

東漢の曆法

飯内 清氏

支那離婚法小史

仁井田 陞氏

十一月十一日(土)午後二時

圖像學上より見たる雲岡石窟

水野 清一氏

夾紵の像器に就いて

松本文三郎氏

なほ當日は、同所第十一回開所記念日として、午前九時より所
 内解放、秦漢石刻拓本、北京古地圖、新得善本、經學文學研究室
 研究狀態等を一般の觀覽に供す。

十二月二日(土)午後一時半

支那訓詁學上より見たる日本書紀の古訓

臺北帝大教授 神田喜一郎氏

民俗學會

例會 折から御來講中の折口信夫博士を中心に、十二月十二日
 (火)午後六時半より、樂友會館小食堂に開催、西田教授以下國史
 研究室の諸氏ならびに近畿民俗學會の方々など多數參會し、折口
 先生より「今後の日本民俗學」と題する講演を拜聴し、引續いて
 懇談に時の移るを覺えなかつた。

出雲路通次郎氏の訃

京都帝國大學文學部元講師出雲路通次郎氏は一昨春秋以來病臥
 中の處、遂に去る十一月二十六日午後十一時自宅に於いて逝去せ
 られた。享年六十有二。洵に哀悼痛惜の極みである。憶ふに氏は
 明治十一年八月八日、山崎闇齋の垂加流神道を傳ふる下御靈神社
 の出雲路家に生を享け、幼少より和漢の書策を披讀し、其の卓拔
 なる才能に依つて能く古今の故實制度に通曉し、遂に有職學の研
 究に於いて獨創的體系を樹立せらるゝに到つたのである。而して
 府社下御靈神社々司並舊靈山官祭招魂社外三所擔當神職として神
 祇に奉仕する餘暇に、内務省及宮内省屬託として、神社奉祀に於
 ける祭典調度其他設備一般の調査考證に當り、明治神宮造營に際
 しては神寶裝飾の事に關して指導に任じ、又東山御文庫取調にも

従事して妙からざる功蹟を致された。更に京都府皇典講究所、大阪府女子専門學校等に教鞭を執つて斯道の研究を普及徳進することに努められた。而して京都帝國大學文學部國史學科に神道史講座の開設せらるゝや昭和九年四月講師として招聘を受け、神道並有職故實の概要を講じ、其の嚴密精緻にして而も高尚優雅なる學風と高潔溫裕の人格とに依り深き尊敬を集められたのである。其の研究方法は汎く史上の文獻資料に徵證を求めて古今の禮儀行事の真相と由來とを根本的に探求し、以て有職故實を秘傳より解放して國史學研究上の一補助學科に迄高めると共に、また實物に就き實地の物と形との觀察より歸納して研究を遂行すべきを主張し、講義時間の半を割いて京都御所、二條城をはじめ各地に殿門樓廊の遺構、調度裝飾の遺品を尋ねて見學指導の勞を惜しまれなかつた。而して朝儀と深き關係を有する、神社の祭祀行事、建築、服裝等の研究は殊に重要視せられ、四季折々諸社の祭禮に後生を誘掖して諄々と神事祭儀の由緒を説いて倦まず、其の見學は恒に學生の隨ふことを欣ぶところとなり、制度法式より發した有職の學も斯くして初學の徒により深くも理解體得ざることを得たのである。昭和十一年秋國史研究室に於いて神道史資料特別展開催の擧あるや氏は自ら陣頭に立ち、夙夜東奔西走壯者を凌ぐ元氣を以て奮闘を続け遂に多大の成果を收むることを得しめられた。而かも翌年十一月第二回展覧の將に開かれんするに先ち突如病魔に冒され、爾來療養に手を弛された結果幸ひ翌十二年春には一旦健康を舊に復して教壇に立たれたが、幾許も無くして再び病床に

就き、家人の熱誠なる看護も遂に空しく忽然として長逝せられたのは寔に痛恨に堪えざる次第である。

越えて十二月二日午後一時より吉田近衛町府立一中跡に於いて嚴かに告別追悼の祭式が営まれ、知友門弟多數會葬して、遺影を仰ぎ德音を追懷し、愛慕の情切々たるものがあつた。

氏の學問體系を窺知すべき著述としては個別的問題に關する論文を除けば僅かに岩波講座日本歴史の爲めに執筆せられた「有職故實(昭和八年十月)」を見得るに過ぎぬ。寧ろ多數の勞作は未定稿として篋底に秘せられ、他日上梓の機を俟つものが尨大の量に達して居たと云ふ。併しながら氏が自ら嚴正なる考證を重ねて王朝の舊規に復原せんことを努め、病床に在つて最後まで製作の指導を續けられた御帳室の模型は財團法人覺學會の寄贈に依つて遂に去る十二月十七日國史研究室に納入せられた。莊嚴優美四邊を壓して自ら畏服の念を起さしむるものあるを觀、是こそ有職學研究の最も根本的な好資料たると同時に、亦氏の斯學に貢獻せられし最後の遺産たるを思ひ戀慕涕泣の情擴く能はざるものを感じるのである。(昭和十四年十二月十八日 稻葉虔信記)

會 報

會 員 動 靜

◇入會

京都市上京區鞍馬口通寺町西入二筋目下ル竹中方

(右野上俊靜氏紹介)

福井縣今立郡中河村

(右藤岡謙二郎氏紹介)

京都市左京區下鴨菱倉町七一ノ四 坪内方

(右原隨園氏紹介)

京都市左京區北白川下池田町三一

京都市左京區北白川追分町四一 竹内方

◇轉居

京都市左京區淨土寺西田町六

鎌倉市長谷大谷戸一三九〇

京都市上京區小山下總町三八ノ一四

水戸市下金町二ノ一五〇三 町田方

名古屋市昭和區東畑町一ノ一

東京市豐島區西巢鴨二ノ二二三七

◇寄贈交換圖書 (十二月現在)

龍谷大學三百年史

東方學報 東京一〇ノ一

北方文化研究報告 二

大陸に於ける宗教工作狀況

東洋文庫十五年史

不破 幹雄氏

齋藤 優氏

豊田 堯氏

城島 徳次氏

柴田 孝夫氏

藤枝 晃氏

三上 次男氏

内藤 戊申氏

高井 篤三郎氏

小澤 吉見氏

川崎 新三郎氏

龍谷大學

東方文化學院

北大北方文化研究室

大倉精神文化研究所

東洋文庫

綜合古瓦の研究第一、第二分册
東洋史會紀要 三
立正史學 三ノ一二

基督教史研究 六
古學叢刊 三、四

史學雜誌 五〇ノ一〇・二一
歷史地理 七四ノ四五

社會經濟史學 九ノ六・七・八
人類學雜誌 五四ノ九・十・十一

考古學雜誌 二九ノ十・十一
文化 六ノ十・十一

國學院雜誌 四五ノ十・十一
史迹と美術 一〇ノ十・十一・十二

社會學徒 一三ノ十・十一・十二
史學 一八ノ二・三

史淵 二二
臺大文學 四ノ四

國民精神文化 五ノ九・一〇・一一・一二
民族學研究 五ノ三・四

商業と經濟 二〇ノ一
京城帝大史學會誌 一五

軍事史研究 四ノ六
紀州文化研究 三ノ一〇

鶴 故 郷 舍
東洋史會
立正大學史學會
基督教史研究會

北京古學院
史學會
日本歷史地理學會
社會經濟史學會

東京人類學會
考古學會
東北帝國大學文化會
國學院大學

史迹美術同致會
社會學徒社
三田史學會
九大史學會

臺大文學會
國民精神文化研究所
日本民族學會
長崎高商研究會

京城大史學會
軍事史學會
紀州文化研究所